

成果報告書

2017年度助成	所属機関	横浜市立白幡小学校	
役職 代表者名	校長 鈴木 秀一	役職 報告者名	教諭 尾方 優祐
タイトル	「21世紀グローバル社会に必要な豊かに学び合う力の育成」 ～教科等を貫く自主的学習力を育成し、活用するカリキュラムの開発～		

※ご異動等で現職の方では成果発表が難しい場合、上記代表者または報告者による代理発表を可といたします

1. 実践の目的（テーマ設定の背景を含む）

（1）学校課題研修として

学校課題研修として、自主的学習力を基盤とした「思考力・判断力・表現力」の育成も各教科の言語活動を中心に行っている。各教科等で言語活動を中心として、自分たちでグループワークを進め、その中で自分の意見を伝え、相手の意見を聞き合うことで学び合いを成立させ思考力・判断力・表現力の育成を図ってきた。理科では、子どもたちが不思議に思ったり、疑問をもったりするような導入や教材、単元構成の工夫を行ってきた。

（2）研究のねらい

本校の研究内容をさらに深めていくために主体的な問題解決を通して、自主的学習力を高めていき、その中で思考力・判断力・表現力を育成することが大切だと考えた。

- ・主体的に問題解決を行っていくためには、より子どもたちが身近に感じたり、自分事として科学的に物事に対して追究していったりする姿が不可欠だと考える。
- ・本校で行っている教科横断的な論理的思考力や表現力を、理科を中心に育成するため抽象度の高い物事を自分たち自身の表現方法で、現時点で考えられる妥当な表現にしていく。
- ・理科では実証性・再現性といった何度やっても同じ結果が出そう必要があるが、時間にも制限がある中でタブレットなどを子どもたちが必要に応じて使えるようにする。

2. 実践にあたっての準備（機器・材料の購入、協力機関等との打合せを含む）

○授業デザイン

- ・新学習指導要領の分析
- ・見方・考え方と本校の一単位時間のかかわりの分析
- ・汎用的能力の整理
- ・各教科等で必要となる能力の分析・整理

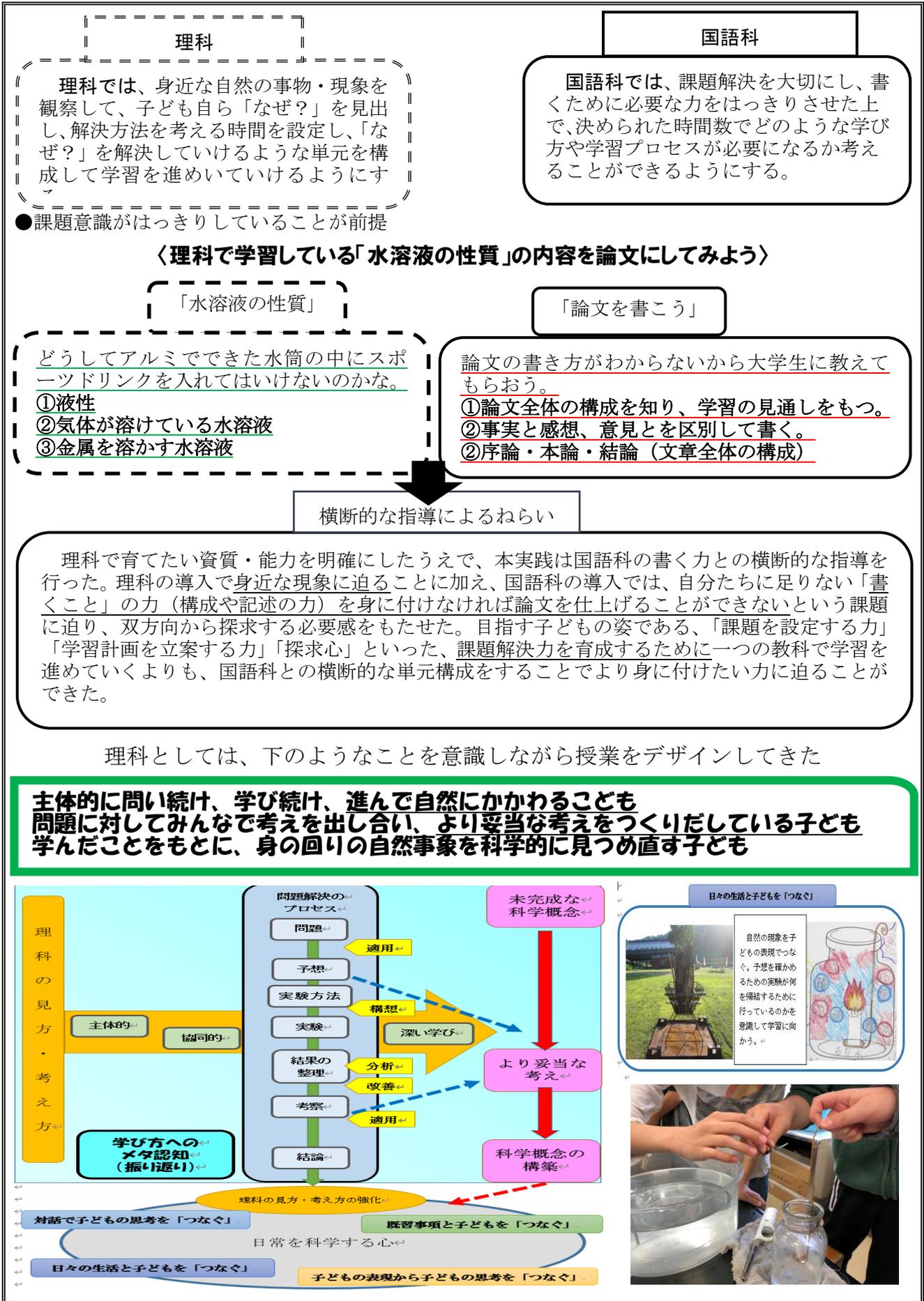
○実態の把握

- ・全国学力調査・横浜市学習状況調査の分析
- ・本校の研究の蓄積から見る児童の実態把握

○実験器具

- ・エネルギー領域を中心とした、数値化が図れる実験器具
- ・可能な限り児童の実験の構想が実現できるための消耗品

3. 実践の内容



5. 今後の展開（成果活用の視点、残された課題への対応、実践への発展性など）

横浜市が行う学習状況調査や全国学力学習状況調査においては、知識的な面はもちろんのこと、活用問題においても平均のポイントを越えた結果が出ている。さらに他教科（主として国語科）との横断的な授業を展開することによって、記述力も身につけてきていることが明らかとなった。

H30 年度全国学力・学習状況調査では、決められた文字数で自分の考えを表出する問題が全国平均 45.6% に対して、本学級の児童は 42.6% と平均を下回っている。そこで記述力を高めるために、理科の考察では事実と解釈を実験結果をもとに、自分の考えを図や絵、言葉を用いて表現できるように学習を続けてきた。このような実態を改善するために、理科という非連続型テキストを読み解き、相手意識を明確にした国語科の書くことと関連させることによって、一定の成果を上げることはできた。今後は、国語科の力を能力ベースとして位置づけ、理科や社会科などの内容が、学習指導要領によって示されている教科を関連させながら問題解決を行い、さらなる研究を深めていきたいと考える。

理科の学習で用いる能力は、理科の学習のみで身に付くものではない。表やグラフの分析は算数科でも育成が可能であるし、予想や考察場面で話し合いを行う時には、グループやクラスの友達と「協議」を行う必要がある。事実と意見を分けて考察を行うことも、他の教科で育成を行うことで、子ども達が考えを整理する時に一役買って出ることが間違いない。どの教科でも「話し合う力」や「分析する力」の指導を行っていきたい。

6. 成果の公表や発信に関する取組み

※ メディアなどに掲載、放送された場合は、ご記載ください

- 小中一貫教育推進重点ブロック校
- 横浜市指定「授業力向上推進校」継続
- 小学校長会 専門研究校
 - ・全教科等にかかわるテーマでの研究
 - ・分析チャートに基づいた「学力向上アクションプラン」の実現
 - ・全国学力・学習状況調査の結果分析による具体的な授業改善の取組
 - ・「横浜版学習指導要領」「同 指導資料」「同 評価ガイド」「授業改善ガイド単元づくり編」「同 教材研究・授業実践編」「同 思考力・判断力・表現力の育成編」「言語活動サポートブック」の活用

7. 所感

理科では、生活科で育まれた自分の思いや経験をもとにして、一つの事象に対し、それぞれが自分の予想をもち実験に取り組む。そして、学び合いを通して多様な見方、考えに気づき、一人ひとりの主観的な考えから事実に基づいた、より客観性の高い科学的な見方に高めていくことができた。

今年度の成果としては、実験の計画を立てる時間や、実験結果が出た後に自分たちの考えた実験が本当に妥当性のある実験だったのか見直し、新たな実験方法やより妥当性の高い実験方法を見直す姿が見られた。このような授業を繰り返し行っていくことで非連続型テキストである「自然」を自分たちの力で読み解き、自己肯定感を高めながら「深い理解」へとつながると考えている。

今まで述べた内容は、私たち教師が子どもをいくつかの研究という「フィルター」を通して評価しているに過ぎない。しかしこれからの予測困難な時代を生き抜いていくために、子どもたち一人一人が確かな学力を身に付けることが不可欠である。子ども達に委ねるところしっかりファシリテートするところを意識して来年度の授業につなげたい。